

常盤東ノ町古墳群

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

常盤東ノ町古墳群

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、集合住宅新築にともなう常盤東ノ町古墳群の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

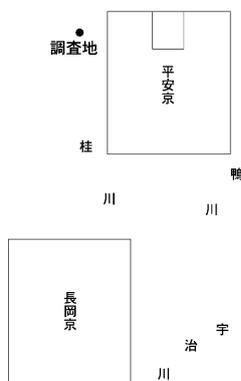
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤東ノ町古墳群
- 2 調査所在地 京都市右京区常盤仲之町 3-26
- 3 委 託 者 今井健一
- 4 調査期間 2008年11月25日～2009年1月14日
- 5 調査面積 390 m²
- 6 調査担当者 平田 泰
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した。）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号と同一とした。
- 13 本書作成 平田 泰
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経緯	1
(2) 位置と環境	2
(3) 周辺の調査	3
2. 遺 構	10
(1) 基本層序	10
(2) 検出遺構	10
3. 遺 物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 出土遺物	18
4. ま と め	21

図 版 目 次

図版1	遺構	1	全景（西から）
		2	竪穴住居 147（東から）
図版2	遺構	1	竪穴住居 81（北東から）
		2	竪穴住居 109（北西から）
図版3	遺物	出土遺物 1	
図版4	遺物	出土遺物 2	

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（東から）	3
図4	調査風景（北東から）	3
図5	周辺調査位置図（1：5,000）	4

図6	基本層序図 (1 : 40)	11
図7	遺構平面図 (1 : 125)	12
図8	竪穴住居 147 実測図 (1 : 50)	13
図9	竪穴住居 81 実測図 (1 : 50)	14
図10	竪穴住居 109 実測図 (1 : 50)	15
図11	土坑 153 実測図 (1 : 20)	16
図12	出土遺物実測図 1 (1 : 4)	18
図13	弥生土器	18
図14	出土遺物実測図 2 (1 : 4)	19
図15	出土遺物実測図 3 (1 : 4)	20

表 目 次

表1	遺構概要表	10
表2	遺物概要表	17
表3	掲載遺物一覧表	22

常盤東ノ町古墳群

1. 調査経過

(1) 調査の経緯

京都市右京区常盤仲之町3-26番地の約1,970㎡の敷地で、集合住宅の新築計画が明らかになった。このため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、文化財保護課という)の試掘調査が実施され、竪穴住居とみられる壁溝の一部が検出された。

当該地は、常盤東ノ町古墳群の範囲に含まれるが、重複して村ノ内町遺跡、常盤仲之町遺跡の範囲内でもある。このため、さらに精細な調査を実施して遺構の全容を解明する必要から、文化財保護課より発掘調査実施の指導がなされ、当研究所に調査が委託される運びとなった。

発掘調査は、2008年11月25日に機材・器材を搬入し、11月26日から機械力による盛土層の除去作業を開始した。12月1日から人力による攪乱層の除去後、遺構の検出作業に入り、12月10日から遺構の掘込みなどの精査を開始し、12月18日には全景写真・個別写真の撮影を行った。12月19日からは平面実測図・各図面類の作成、各遺構の掘抜き作業を実施した。年明け、

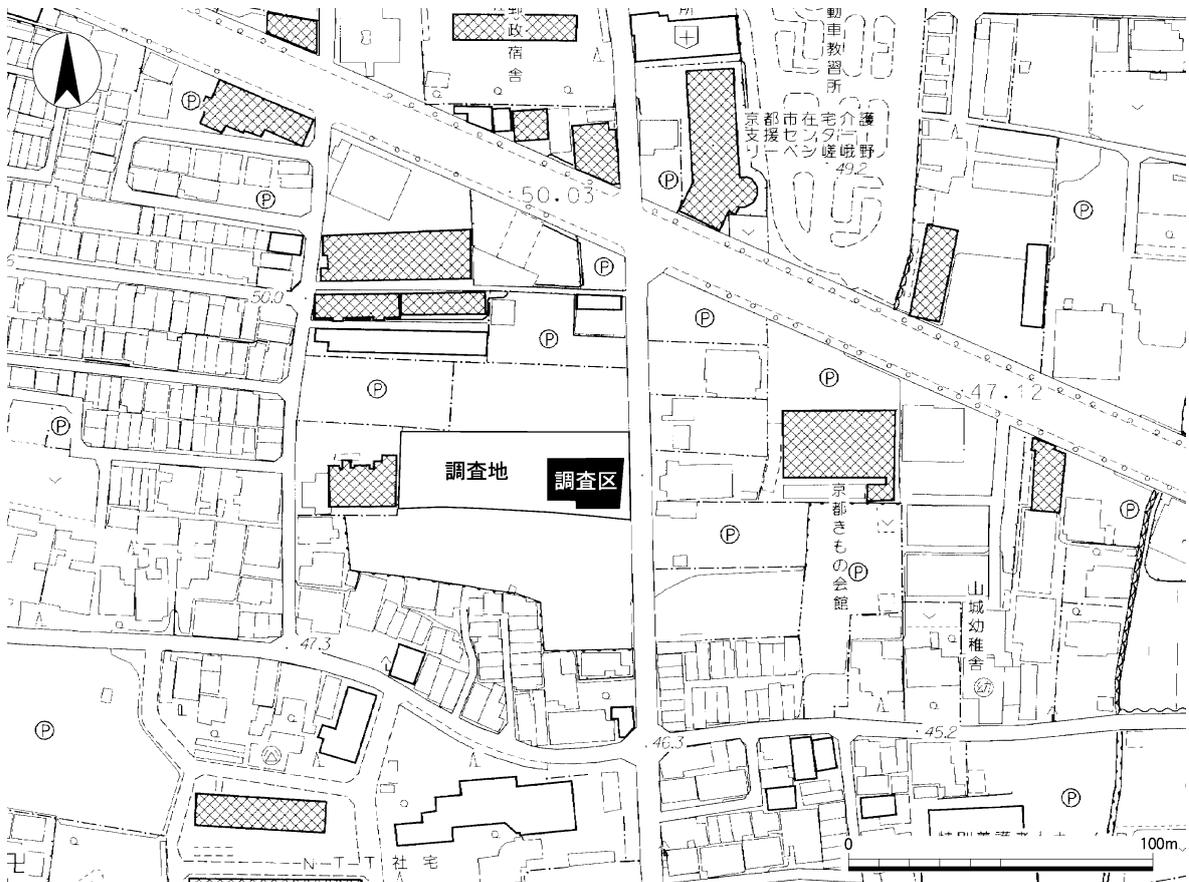


図1 調査位置図 (1:2,500)

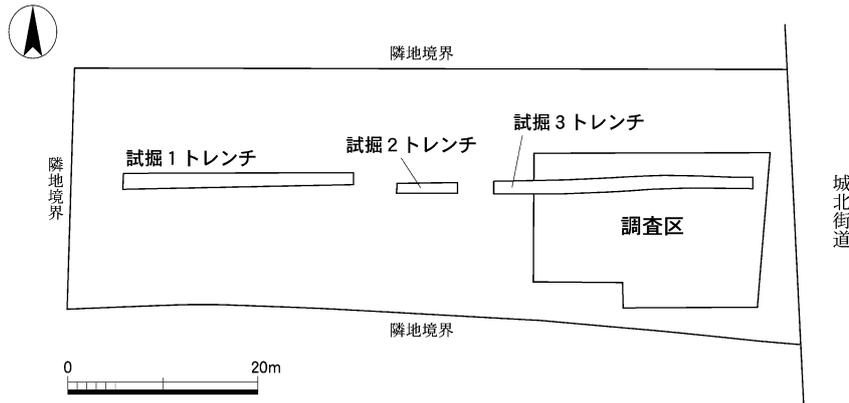


図2 調査区配置図（1：800）

2009年1月5日から調査区の断割り調査と断面図類の作成を行い、1月9日から調査区の埋め戻しを始め、1月13日には機材・器材の引上げ、1月14日に調査現場の引渡しを行い、発掘調査の作業を終了した。この間に文化財保護課による現地指導を11月26日、12月16日に受けた。

現場での調査終了後、直ちに実測図面類の点検、出土遺物の洗浄・点検・実測などの報告書の作成準備を行い、挿図、写真図版の作製、本文の執筆を経て報告書を作成し、この刊行をもって本調査に関わるすべての業務を完了した。

（2）位置と環境

調査地は京都市右京区常盤仲之町3-26番地で、京都の北西郊、双ヶ岡一ノ丘南西約600mに位置し、常盤仲之町は新丸太町通と梅津太秦線（城北街道）の交差点付近を中心としている。常盤地区の南側には広隆寺で有名な太秦地区があり、宇多野吉祥院線で南北に分けられる。

北方には音戸山が見渡せ、その南側の低平な台地に常盤や太秦地区が位置する。北側の音戸山と白砂山を分けて南東流する御室川は、双ヶ岡の丘陵崖に流路を規制されて南側方向への曲流傾向がみられる。現在の双ヶ岡三ノ丘南方で西ノ川や宇多川と合流する以前の一時期、鳴滝桐ヶ淵町辺りから京福北野線沿いに南下すると、常盤窪町、太秦西蜂ヶ岡町に至る流路の存在も現地形の起伏から読み取れる。その出口が帷子ノ辻付近であり、台地の縁辺部に縄文時代早期・前期の遺物が出土した上ノ段町遺跡がある。こうしたことから、常盤や太秦の台地は御室川によって造成されたものであり、3万年から4万年前の温暖期に形成された古期の扇状地性段丘とみることができよう。

常盤、太秦地区の遺跡は、弥生時代中期と弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡も重複する村ノ内町遺跡、和泉式部町遺跡、西野町遺跡が知られる。その後、和泉式部町遺跡に古墳時代中期の遺構が確認されるが、中心地域では古墳時代後期を待つことになる。

古墳時代後期から飛鳥時代には広隆寺旧境内、常盤東ノ町古墳群、常盤仲之町遺跡、奈良時代から平安時代には広隆寺、常盤仲之町遺跡があり、一ノ井遺跡が加わる。

平安時代には双ヶ岡三ノ丘東麓に清原夏野の山荘、南西麓の常盤地区に源常の山荘、太秦地区に広隆寺が法灯を護持している。



図3 調査前全景（東から）



図4 調査風景（北東から）

《参考文献》

『京都の歴史1』平安の新京（株）学芸書林 1970年

『史料 京都の歴史』第14巻 右京区（株）平凡社 1994年

横山卓雄『京都の自然史』（株）京都自然史研究所 2004年

『京都市遺跡地図台帳』[第8版]京都市文化市民局 2007年

（3）周辺の調査（図5）

常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・仁和寺子院跡

調査1は、昭和51年（1976）に右京区常盤東ノ町26－5番地で織物会社社屋新築工事に伴って実施した発掘調査である。当初は仁和寺子院跡として遺跡登録された地区の調査であった。調査では古墳時代後期の横穴式石室を有する円墳3基、鎌倉時代から江戸時代の土壙墓多数、鎌倉時代から江戸時代の溝3条を検出した。出土遺物には、3基の円墳から出土した須恵器杯蓋・杯身・高杯・壺・脚付壺、土師器椀・壺・甕、鉄製品鏃・刀子・皮吊金具、銅製環・柄頭などがある。また、古墳の封土から弥生時代中期（Ⅱ～Ⅳ様式）の壺・甕・高杯が出土し、近隣の弥生遺跡（村ノ内町遺跡）発見の端緒となった。

調査2は、昭和51年（1976）に調査1の東隣地である常盤東ノ町7番地で実施した発掘調査である。調査では調査区の南西部で円墳の周溝と墳丘を検出した。横穴式石室は削平を受けて遺存していない。出土遺物には、古墳時代後期の須恵器杯蓋などがある。

調査3は、昭和51年（1976）に新丸太町通に面した調査2の南東隣接地で関西電力株式会社の双ヶ岡変電所増築工事に伴って実施した発掘調査である。調査では平安時代中期の土坑を検出した。出土遺物には、弥生時代中期の壺・甕、弥生時代末から古墳時代初めの二重口縁壺・甕、10世紀代の土師器皿などがある。弥生時代末から古墳時代初めの二重口縁壺の出土は、弥生遺跡（村ノ内町遺跡）に重ねて、新たな時期が加えられることになった。

調査4は、昭和55年（1980）に常盤仲之町で京都府公務員宿舎建設に伴って実施した発掘調査である。調査では古墳時代後期の古墳周溝、平安時代後期の土壙墓などを検出した。出土遺物には、古墳時代後期の土師器杯・壺・甕、須恵器杯身、平安時代後期の土師器皿などがある。古

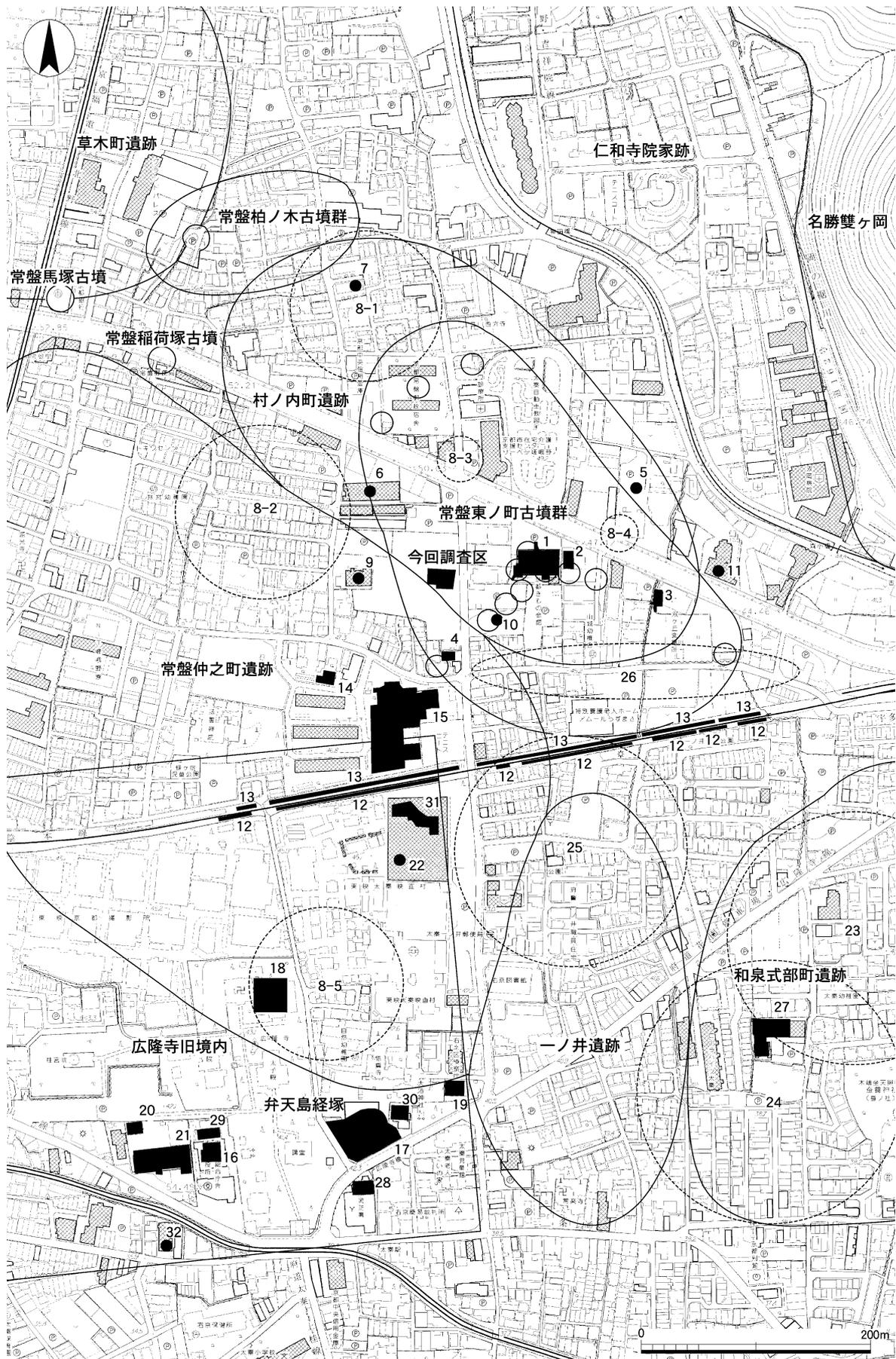


図5 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

墳周溝は円墳周溝の北東部分を検出したもので、本体が南西部に比定されるが、既存住宅によって破壊されたとみられる。

調査 5 は、昭和 55 年（1980）に常盤東ノ町 6－3 で実施した立会調査である。調査では地表下 0.70 m の濃茶褐色泥砂層から弥生時代の土器が出土した。

調査 6 は、昭和 57 年（1982）に常盤村ノ内町 1－5・14 で実施した試掘調査である。調査では表土下 0.5 m 以下で古墳時代後期から室町時代の遺物包含層・土坑群を検出した。

調査 7 は、昭和 61 年（1986）に常盤村ノ内町 8－20 で実施した試掘調査である。調査では地表下 1.0 m で弥生時代の土坑、地表下 1.56 m で弥生時代中期の溝を検出した。

調査 8 は、昭和 63 年（1988）に常盤東ノ町、出口町、村ノ内町、柏ノ木町、下田町、馬塚町、窪町、西町、太秦蜂岡町地内で下水道工事に伴って実施した広域立会調査である。調査では弥生時代中期の遺物包含層を村ノ内町一帯、東ノ町北部（8-1）で検出した。弥生時代末から古墳時代初めの土坑・遺物包含層を西町一帯（8-2）で検出した。古墳時代後期の遺構は、溝と古墳周溝を東ノ町の城北街道と丸太町通交差点（8-3）で、古墳周溝を東ノ町南東部、丸太町通沿い（8-4）で検出した。また、平安時代の遺構群を蜂岡町（8-5）で検出した。出土遺物には、弥生時代のⅣ様式の土器、弥生時代末から古墳時代初めの庄内式期の壺、古墳時代後期の須恵器杯・甕、平安時代前期の土師器甕・杯、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗などがある。

調査 9 は、平成 3 年（1991）に常盤一ノ井町 8－3 他で実施した試掘調査である。調査では地表下 0.5 m で弥生時代の遺物包含層、平安時代の溝などを検出した。

調査 10 は、平成 5 年（1993）に常盤東ノ町 16－5 で実施した試掘調査である。調査では地表下 0.64 m で古墳周溝とみられる溝状遺構、平安時代から鎌倉時代の土坑を検出した。

調査 11 は、平成 7 年（1995）に常盤一ノ井町 5・5－1 番地で実施した立会調査である。調査では古墳時代の溝、平安時代の溝などを検出した。出土遺物には、古墳時代の溝から出土した古墳時代後期の須恵器杯身・杯蓋、鉄製品刀子、平安時代の溝から出土した平安時代前期の土師器皿・甕、須恵器壺・甕、黒色土器皿、灰釉陶器壺がある。古墳時代後期の溝は古墳の周溝の可能性を指摘されており、平安時代前期の溝は山荘か集落などの居住関係に伴ったものとされている。

調査 12 は、平成 18 年（2006）に太秦一ノ井町から太秦青木元町間の J R 山陰線軌道敷内で複線高架化工事に伴って実施した発掘調査である。調査では弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の溝などを検出した。出土遺物には、弥生時代の竪穴住居から出土した弥生時代中期（Ⅱ様式）の壺・甕、古墳時代の竪穴住居から出土した古墳時代後期（6世紀代）の須恵器杯身・杯蓋・壺・甕、土師器竈、石棺の可能性のある加工痕のある石材、飛鳥時代の竪穴住居から出土した須恵器杯蓋・杯身・高杯・壺、滑石製紡錘車、土錘などがある。平安時代の遺物には、溝から出土した平安時代前期の須恵器杯・壺、灰釉陶器壺がある。

調査 13 は、平成 20 年（2008）に実施した梅津太秦線限度額立体交差事業に伴う発掘調査で、

平成 18 年度調査（調査 12）の北側部分にあたる。調査では弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居・炉・土坑・溝・掘立柱建物、奈良時代から平安時代の掘立柱建物・溝、鎌倉時代の池・土坑などを検出した。出土遺物には、縄文時代の凹基無茎石鏃、弥生時代の竪穴住居から出土した中期（IV様式）の無頸壺・壺・高杯、古墳時代後期の須恵器杯身、飛鳥時代の土師器杯・甕、須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、ガラス製品、奈良時代から平安時代の土師器杯・椀・高杯・甌・甕、須恵器蓋・杯、鎌倉時代の土師器皿、滑石製釜などがある。

常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡

調査 14 は、昭和 52 年（1977）に常盤東蜂岡町で日本電信電話公社の嵯峨野住宅集会所新築に伴って実施した発掘調査である。調査では中世の柱穴群、江戸時代の溝などを検出した。出土遺物には、中世の土師器皿、江戸時代の土師器皿・塩壺、染付磁器椀などがある。

調査 15 は、昭和 52 年（1977）に常盤東蜂岡町 15 番地で日本電信電話公社の社宅増設に伴って実施した発掘調査である。調査では古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝、鎌倉時代以降の土壇墓などを検出した。出土遺物には、古墳時代後期から飛鳥時代の土師器椀・鉢・壺・甕、須恵器杯蓋・杯身・長頸壺・壺・甕、平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿、瓦器釜・鍋などがある。

調査 16 は、昭和 52 年（1977）に太秦蜂ヶ岡町 31、同桂木町 8－4 で右京区役所の新別館新築工事に伴って実施した発掘調査である。調査では奈良時代の土坑・基壇地業、平安時代の掘立柱建物、室町時代の土坑などを検出した。出土遺物には、古墳時代後期の円筒埴輪、飛鳥時代の土師器杯、須恵器壺・甕・瓦類、奈良時代の土師器杯・皿などがある。

調査 17 は、昭和 52 年（1977）に太秦蜂ヶ岡町 36－1 番地の広隆寺旧境内弁天池と中島で実施した発掘調査である。調査では中島上で 16 基の経塚を検出した。出土遺物には、中島の盛土から出土した平安時代の土師器皿、緑釉陶器椀、瓦類があり、経塚に伴う礫石経、青銅製経筒・蓋、鏡、青白磁合子、輸入銭貨、金箔甕、銅製椀、柄香炉、銅鈴、飾金具、ガラス玉、水晶玉、瑠璃玉、土玉、木玉、鋏、刀子、螺髪、硯、翡翠製分銅、白磁小皿などがある。

調査 18 は、昭和 55 年（1980）に太秦蜂ヶ岡町 32 番地の広隆寺北域で新霊宝殿建設に伴って実施した発掘調査である。調査では飛鳥時代の竪穴住居、鎌倉時代から室町時代の柱穴・土坑を検出した。出土遺物には、古墳時代から飛鳥時代の円筒埴輪、土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・壺、瓦類、平安時代の土坑から出土した土師器椀・皿、須恵器杯・壺、瓦類、鎌倉時代から室町時代の土師器皿、瓦器椀、陶器椀・摺鉢・甕、磁器椀・皿、瓦類がある。

調査 19 は、昭和 55 年（1980）に太秦東蜂岡町 1－2 番地で右京区検察庁の庁舎建替え工事に伴って実施した発掘調査である。調査では飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物・柵・土坑などを検出した。出土遺物には、飛鳥時代の土師器椀・鉢・壺・甕、須恵器杯蓋、平安時代中期の土師器皿・高杯・甕、黒色土器椀、須恵器壺・鉢、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿、瓦類がある。

調査 20 は、昭和 56 年（1981）に太秦桂木町・蜂ヶ岡町 31 番地で太秦警察署の改築に伴って

敷地北西部で実施した発掘調査である。調査では平安時代前期の土坑、平安時代前期から中期の溝、平安時代中期の石敷き土坑を検出した。出土遺物には、平安時代前期の土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・杯・壺・瓶子、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、瓦類、石製硯などがある。

調査 21 は、昭和 57 年（1982）に太秦桂木町・蜂ヶ岡町 31 番地で太秦警察署の改築に伴って実施した第 2 回目の発掘調査である。調査区は第 1 回目の調査（調査 20）の南東に設定されている。調査では飛鳥時代の土坑、平安時代の土坑・溝・梵鐘鑄造遺構を検出した。出土遺物には、飛鳥時代の瓦類（軒瓦・鬼板・平瓦・丸瓦）、平安時代中期の土師器杯・皿・盤・高杯・甕、須恵器杯・椀・壺・甕・鉢、黒色土器杯・椀・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿・壺、白磁椀、製塩土器、梵鐘鑄型、溶融炉、鞆羽口、銅滓、平安時代後期の土師器皿、須恵器瓶などがある。

調査 22 は、昭和 57 年（1982）に太秦東蜂岡町 10 番地で実施した試掘調査である。調査では地表下 0.7 m の地山面で古墳時代後期から室町時代の土坑・柱穴を検出した。

調査 23 は、昭和 60 年（1985）に太秦和泉式部町・太秦森ヶ東町地先で公共下水道工事に伴って実施した広域立会調査である。調査では弥生時代末から古墳時代初めの竪穴住居・土坑・溝、平安時代中期の土坑・落込み遺構を検出した。出土遺物には、弥生時代末から古墳時代初めの土器壺・甕・高杯・器台、平安時代中期の瓦類がある。

調査 24 は、昭和 60 年（1985）に太秦蜂ヶ岡町・太秦垣内町・太秦森ヶ西町で公共下水道工事に伴って実施した広域立会調査である。調査では弥生時代末から古墳時代初めの竪穴住居・溝・土坑、平安時代の落込み遺構・土坑、室町時代の落込み・土坑・溝・柱穴などを検出した。出土遺物には、弥生時代末から古墳時代初めの土器壺・甕・高杯・器台・台付鉢、平安時代前期の土師器皿、須恵器杯、平安時代後期の土師器皿、室町時代の土師器皿、陶器椀などがある。

調査 25 は、昭和 62 年（1987）に太秦東蜂岡町・太秦一ノ井町・太秦和泉式部町地先で公共下水道工事に伴って実施した広域立会調査である。調査では古墳時代後期の土坑・流路・柱穴、奈良時代から平安時代の土坑・溝・柱穴などを検出した。出土遺物には、古墳時代前期の土師器甕、古墳時代後期の土師器甕、須恵器甕、奈良時代の土師器杯、須恵器杯、平安時代の土師器皿、緑釉陶器椀、須恵器杯、黒色土器椀、白磁椀、瓦類、凝灰岩片などがある。

調査 26 は、昭和 62 年（1987）に太秦一ノ井町・常盤東ノ町・太秦蜂岡町・太秦桂木町地先で公共下水道工事に伴って実施した広域立会調査である。調査では古墳時代後期の古道の路面・古墳周溝・遺物包含層を検出した。古道の路面は数面の重なった路面を検出したもので、古墳時代から現在まで使用されている道路の路面跡とみられる。出土遺物には、古墳時代後期の須恵器杯蓋、土師器甕、平安時代の土師器皿、須恵器杯、瓦類がある。

調査 27 は、昭和 62 年（1987）に太秦森ヶ西町 18 - 2 他で集合住宅建設に伴って実施した発掘調査である。調査では弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代中期の竪穴住居を検出した。出土遺物には、弥生時代中期の土器壺・甕・台付無頸壺・水差形土器、鉄製品鋤先、古墳時代前期の土師器壺・甕・高杯・器台・鉢・手焙形土器、古墳時代中期の土師器甕・高杯、韓式系土器甕・甌、須恵器杯蓋・壺・甕・甗などがある。

調査 28 は、平成 3 年（1991）に太秦蜂岡町 36 番地で右京消防署の庁舎改築に伴って実施した発掘調査である。調査では飛鳥時代の溝・土坑・柱穴・竈、平安時代から鎌倉時代の土坑・遺物包含層を検出した。出土遺物には、飛鳥時代の土師器杯・甕、須恵器蓋・杯・壺・甕、瓦類、平安時代の土師器皿・杯・椀・甕、須恵器蓋・杯・壺・甕、緑釉陶器皿・椀・鉢・香炉・壺、灰釉陶器皿、黒色土器椀、瓦器椀、瓦類、金銅製仏像、銭貨、鋳型、窯壁、融着瓦、壁土などがある。飛鳥時代の竈は竪穴住居に付属したものだだが削平を受けて竈のみが遺存したものとみられる。

調査 29 は、平成 3 年（1991）に太秦蜂岡町 31 番地で、右京区役所の総合庁舎増築工事に伴って実施した発掘調査である。調査では平安時代前期の溝、平安時代中期の土坑・柱穴を検出した。平安時代前期の溝は 2 条が東西方向に併行して延びた溝で、垣塀施設の内外溝の可能性がある。出土遺物には、平安時代前期の土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・瓶子・壺・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、黒色土器椀、瓦類がある。

調査 30 は、平成 5 年（1993）に太秦蜂岡町 36 - 4 で右京消防署の宿舎建設に伴って実施した発掘調査である。調査では飛鳥時代の竪穴住居・土坑、平安時代中期の溝・柱穴、室町時代・桃山時代の溝を検出した。出土遺物には、飛鳥時代の土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平安時代中期の土師器皿・釜、須恵器杯・瓶子・甕、白磁皿・椀・壺、瓦類などがある。

調査 31 は、平成 8 年（1996）に太秦東蜂岡町で建物建設に伴って実施した発掘調査である。調査では飛鳥時代の竪穴住居、平安時代から江戸時代の遺構を検出した。

調査 32 は、平成 9 年（1997）に太秦桂木町 9 番地で集合住宅建設に伴って実施した立会調査である。調査では飛鳥時代から奈良時代の土坑・遺物包含層、平安時代の土坑を検出した。出土遺物には、飛鳥時代から奈良時代の土師器、須恵器、平安時代の土師器、須恵器甕・瓶子、瓦類がある。

調査報告書（図 5 周辺調査位置図に番号が対応する）

- 1 鈴木廣司・百瀬正恒・平田 泰『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 - I（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 年
- 2 鈴木廣司・木下保明『常盤東ノ町古墳群発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 年
- 3 百瀬正恒『仁和寺子院跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977 年
- 4 平田 泰「常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997 年
- 5 調査概要一覧表「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981 年
- 6 調査概要一覧表「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 57 年度 京都市文化観光局 1983 年
- 7 調査一覧表「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 61 年度 京都市文化観光局 1987 年
- 8 平田 泰・加納敬二「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
- 9 試掘調査一覧「仁和寺院家跡」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成 3 年度 京都市文化観光局 1992

- 年
- 10 試掘調査一覧「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局
1994年
 - 11 川村雅章・吉本健吾「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡」『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度
京都市文化市民局 1996年
 - 12 東 洋一・加納敬二『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
 - 13 前田義明・尾藤徳行・小松武彦・北野信彦『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研
究所発掘調査報告 2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
 - 14 平尾政幸「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落発掘調査報告』
京都市埋蔵文化財研究所調査報告-Ⅲ (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
 - 15 鈴木廣司・伊藤 潔『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-Ⅲ (財)
京都市埋蔵文化財研究所 1978年
 - 16 平田 泰「広隆寺旧境内1」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)
京都市埋蔵文化財研究所 1997年
 - 17 小檜山一良「広隆寺旧境内・弁天島経塚群」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告
第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
 - 18 上村和直「広隆寺旧境内2」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)
京都市埋蔵文化財研究所 1997年
 - 19 平田 泰「広隆寺跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
 - 20 石尾政信「1 広隆寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査
研究センター 1982年
 - 21 石尾政信「2 広隆寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査
研究センター 1982年
 - 22 調査概要一覧表「広隆寺境内遺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観
光局 1983年
 - 23 平田 泰「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都
市埋蔵文化財研究所 1988年
 - 24 平田 泰「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
 - 25 平田 泰・加納敬二「広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・和泉式部町遺跡・一ノ井遺跡・森ヶ東瓦窯跡・
常盤東ノ町古墳群」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所
1991年
 - 26 平田 泰・加納敬二「常盤東ノ町古墳群・常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内」『昭和62年度 京都
市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
 - 27 辻 裕司・菅田 薫・前田義明「和泉式部町遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)
京都市埋蔵文化財研究所 1991年
 - 28 平田 泰・小檜山一良「広隆寺旧境内1」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都
市埋蔵文化財研究所 1995年
 - 29 平田 泰・小檜山一良「広隆寺旧境内2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都
市埋蔵文化財研究所 1995年
 - 30 平田 泰「広隆寺旧境内」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研
究所 1996年

- 31 関西文化財調査会「常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内」平成7年度発掘調査実績報告
 32 尾藤徳行・吉本健吾・小檜山一良「広隆寺旧境内」『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度 京都市文化市民局 1998年

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は東西約 80 m、南北 25 mの長方形を呈する敷地で、調査地の中央北側に標高の最高地点があり、東西と南側に緩やかな傾斜面を持つ。調査区は東端の城北街道に近い位置に東西約 25 m、南北約 17 mで設定した。

調査区の最上面にはアスファルト、近・現代の盛土層が約 0.5～0.6 mで堆積する。この下層には、江戸時代以降の耕作土とみられる黄灰色砂泥の堆積層が約 0.4 mの厚さで見られるが、部分的に近・現代層による削平を受けている。この堆積層の下層に灰黄褐色砂泥層が約 0.4 mの厚さで調査区全面にみられる。飛鳥時代、平安時代などの遺構はこの土層で覆われており、排土後に検出される。このため、この灰黄褐色砂泥層は平安時代後期以降に原野状態で経年、堆積したものとみることができる。遺構が成立する黄褐色砂礫、黄褐色泥砂は固く締まった暗灰黄色砂礫や黄褐色砂礫の上面に、細砂層、シルト層などの間層を挟んで 0.8～1.1 mの厚さで堆積する。この堆積層上面は土壌化しており、堆積後の地表面として経年した痕跡がみられる。太秦台地の縁辺部にあたる、調査地やや南西の上ノ段町遺跡で縄文時代早期・前期の土器が出土している。少なくとも 3 万年から 4 万年前の温暖期にこの堆積土層は形成されたもので、1 万 8 千年前の最終氷河極相期を経て、縄文海進期に入り、縄文時代早期以降の地表面を形成したものとみてとれる。

(2) 検出遺構

調査で検出した遺構は、飛鳥時代の竪穴住居、堀状遺構、平安時代の柱穴、池状遺構、土坑、江戸時代の土坑、柱穴がある。

飛鳥時代

竪穴住居 147 (図 8、図版 1-2) 調査区の北西隅で検出した。平面形は方形とみられる。東西約 5.0 m、南北 3.0 m以上を測る。N 15 度Wで、北西への傾きを持つ。東西の壁溝を確認した。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
飛鳥時代	竪穴住居、堀状遺構	
平安時代	池状遺構、柱穴、土坑	
江戸時代	土坑、柱穴	

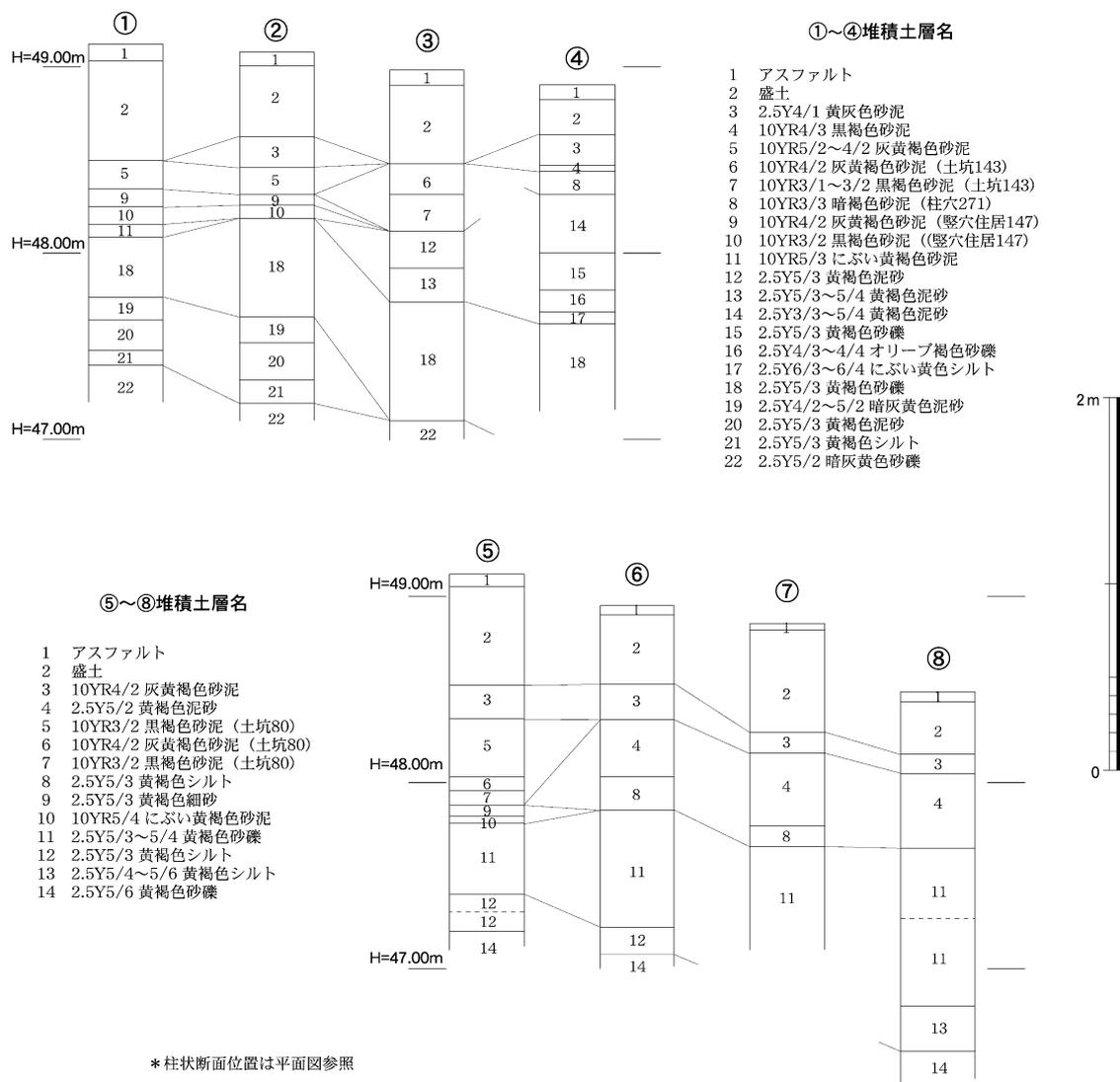


図6 基本層序図(1:40)

南側は削平され、北側は調査区外である。壁溝幅は0.07 m、深さは約0.1 mを測る。床面は固く締まった黒褐色砂泥層からなる。南西部と南東部に柱穴を確認している。平面形は円形で径0.2～0.3 m、深さは約0.2 mを測る。

竪穴住居 81 (図9、図版2-1) 調査区の中央で検出した。平面形は長方形で、N 25度Wの北西への傾きを持つ。南北約5.8 m、東西約3.2 mを測る。壁溝は幅約0.2 m、深さ約0.15 mで、西側、南側、北側の一部に認められるが、北側東部分と東側には検出されていない。床面は暗褐色のやや固くなった面からなる。中央やや北側に径約1.2 m、深さ約0.1 mの平面形が円形の貯蔵穴がある。南側中央には径0.8 m、深さ0.1 mの円形の土坑内に、短径0.12 m、長径0.18 mの上面平坦な石材が据えられる。なんらかの加工用の施設の可能性はある。

竪穴住居 109 (図10、図版2-2) 調査区の北東辺で検出した。平面形は方形とみられる。北半を欠いている。N 35度Wで北西への傾きを持つ。東西約3.5 m、南北3.0 m以上を測る。壁溝

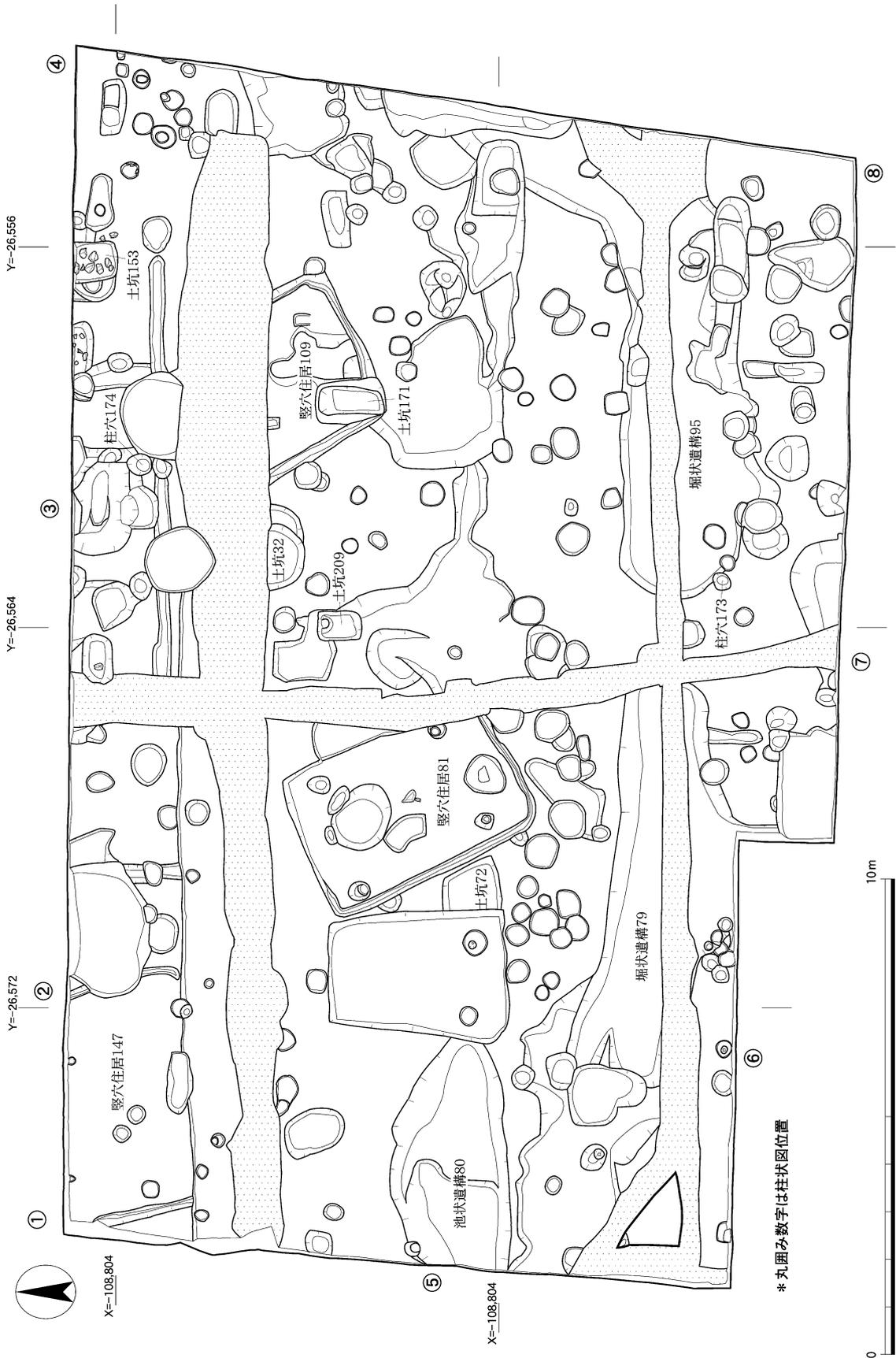
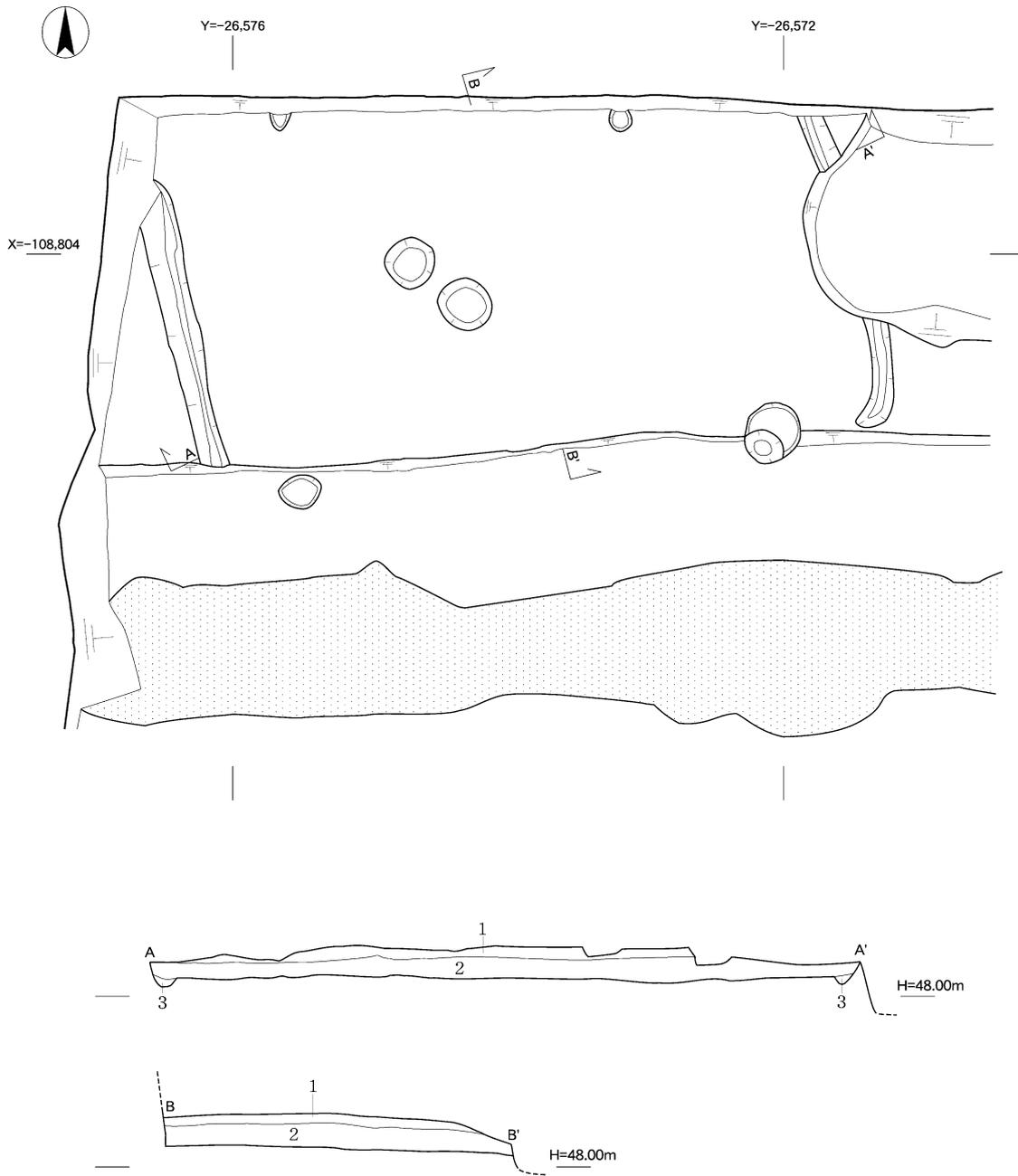
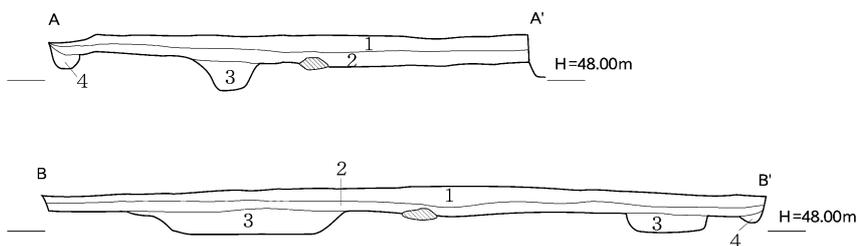
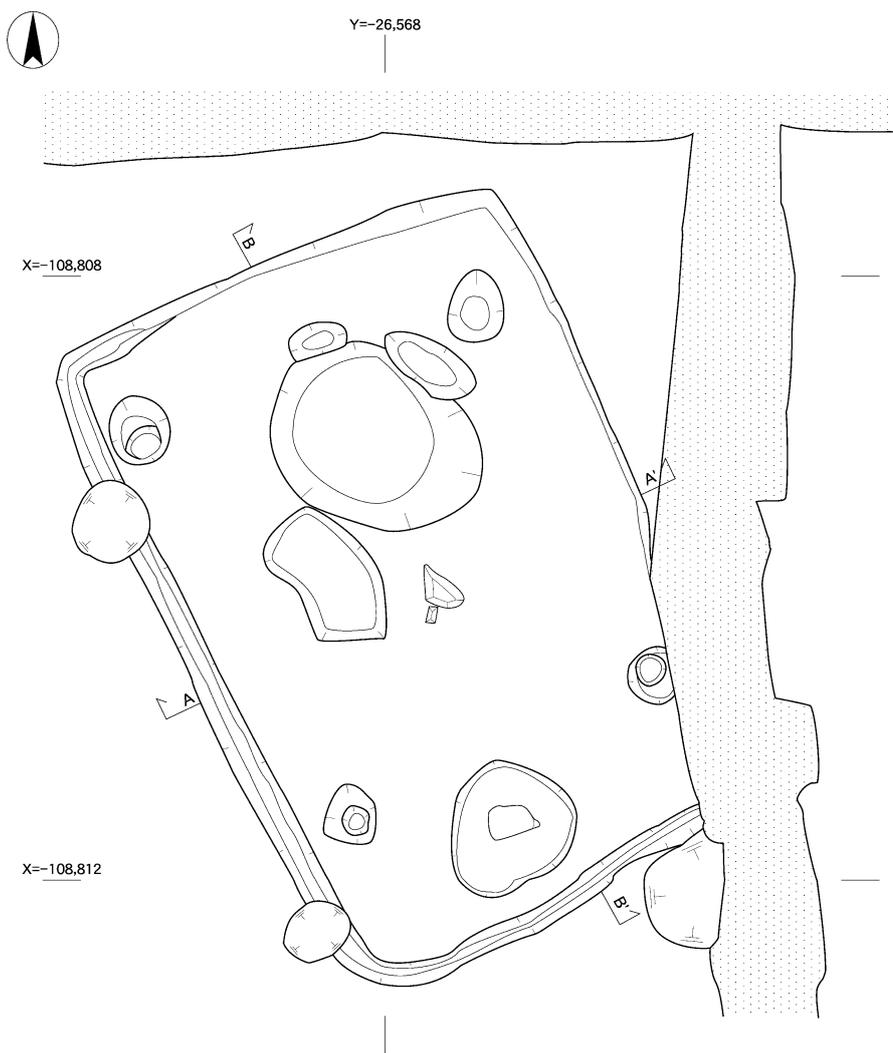


図7 遺構平面図 (1 : 125)



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭・土師器片微量混
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・土師器片微量混
- 3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥

図8 竪穴住居 147 実測図 (1 : 50)



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥、土師器片少量混
- 2 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 4 10YR3/4 暗褐色砂泥



図9 竪穴住居 81 実測図 (1 : 50)

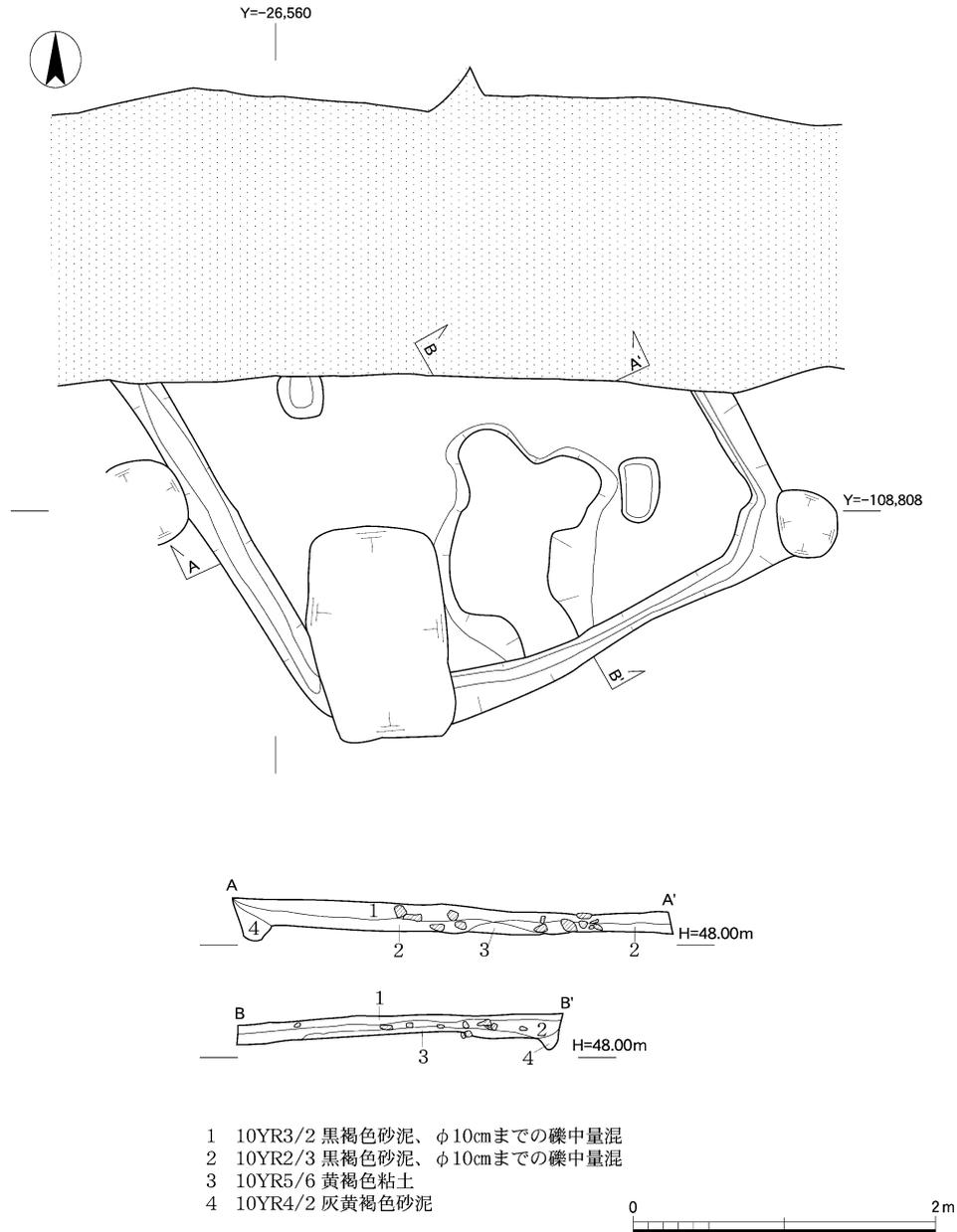


図 10 竪穴住居 109 実測図 (1 : 50)

は幅約 0.2 m、検出面からの深さ約 0.2 mを測る。柱穴は南東部で径約 0.3 m、深さ約 0.05 mのものを確認した。床面中央に厚さ 0.15 mの暗黄白色粘土の塊を検出した。保管していたものとみられる。

堀状遺構 79 調査区西側南辺を東西に延びて、調査区中央やや西で南方向へ屈曲する。最大幅 3.0 m、最深部で 0.5 mを測る。東端部が浅くなり、上がりきって東側の堀状遺構 95 との間通路状の陸橋部を造る。

堀状遺構 95 調査区東側南辺で検出した。調査区中央から東西方向に延び、東端でやや北東方向への曲がりを見せる。幅 2.0 ~ 3.0 m、深さ約 0.5 mを測る。西側の堀状遺構 79 との間で幅 1.5 mの通路状の陸橋部を構成する。

平安時代

池状遺構 80 調査区中央西端で検出した。南北約 2.5 m、東西 4.0 m 以上で、調査区外に延びる。西壁付近で南北に膨らむことから、長楕円の平面形と推定される。堆積はレンズ状で、最下層の埋土に土壌化した泥土層がみられる。長期にわたって徐々に埋没した痕跡を示している。

柱穴群 径 0.2 ～ 0.6 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m を測り、埋土は黒褐色系のもものと灰黄褐色のものが混在する。調査区全域にわたって検出したが、調査区の南辺と東辺からより多く検出され、部分的に固まって検出される箇所が複数存在する。配列を参考にして建物や柵を復元することは、極めて困難である。

柱穴 173 調査区の南側中央で検出した。径 0.4 m、深さ 0.3 m を測り、埋土は暗褐色砂泥層の埋土を持つ。

柱穴 174 調査区の中央やや北東側で検出した。径 0.5 m の円形で、深さは 0.3 m を測る。黄褐色砂泥の埋土を持つ。

江戸時代

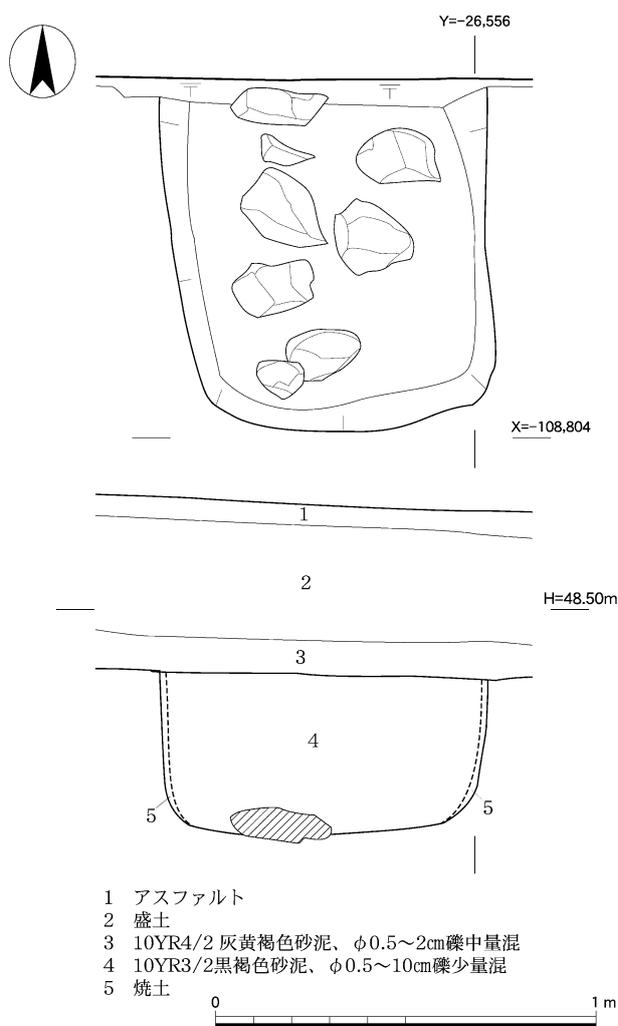


図 11 土坑 153 実測図 (1 : 20)

土坑 72 調査区の中央西寄りに検出した。南北 1.3 m、東西 1.6 m 以上で、平面形は長方形を呈する。深さ 0.1 m と浅い。埋土は黒褐色砂泥層で、少量の炭片が出土した。

土坑 32 調査区の中央北寄りで検出した。平面形は円形で、径 1.4 m、深さ 0.4 m を測る。暗オリーブ褐色の埋土を持つ。完形の土師器皿が埋土上層で検出した。

土坑 153 (図 11) 短軸約 0.9 m、長軸 1.2 m 以上、深さ約 0.4 m の隅丸長方形を呈する。土坑底部に 8 個以上の径 0.2 ～ 0.3 m の石材を間隔を空けて配置している。石材の表面は焼け焦げた痕跡のあるものがあり、土坑壁は明赤褐色の焼土面となっている。数次の加熱が加わったとみられよう。土坑底部から鉄釘が出土しており、火葬に供された火葬土坑とみてとれる。

土坑 171 幅約 0.9 m、長さ約 1.5 m、深さ 0.3 m の隅丸長方形を呈する。長軸を北西に向ける。土坑底部の四隅を中心に鉄釘が出土し、土坑北辺部で骨片が出土した。土坑内に焼土や炭片が認められないため、火葬を経

ずに棺を土坑内に直接埋納した埋葬土坑とみられよう。

土坑 209 幅 0.8 m、長さ 1.4 m、深さ 0.5 m の隅丸長方形で、長軸を北に向ける。土坑底部の四隅で鉄釘が、土坑北辺で骨片が出土した。焼土や炭片は認められない。埋葬土坑とみられよう。

3. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土した遺物には、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器、飛鳥時代の土師器、須恵器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦類、江戸時代の土師器、陶器、染付磁器がある。

弥生時代の土器は甕底部片とみられるもので、混入遺物である。IV様式に属する。古墳時代の須恵器は杯身が 1 点出土した。近隣の古墳からの混入遺物とみられる。古墳時代後期、7 世紀前葉のものとみられよう。

飛鳥時代の土師器には椀、杯、高杯、壺、鉢、甕などがある。須恵器には杯、蓋、鉢、甕などがある。竪穴住居や堀状遺構から出土した。時期的には 7 世紀末葉から 8 世紀前半のものとみられる。

平安時代の遺物は土師器皿、須恵器杯・蓋・鉢・壺・甕、緑釉陶器椀・盤、灰釉陶器皿・蓋、瓦器椀、瓦類が、池状遺構、柱穴、土坑などから出土した。全体的に平安時代前期から中期にかけてのものと一部で後期のものが出土している。須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などには 9 世紀後半代のものがあり、土師器皿は 10 世紀初頭から前半のもの、瓦器椀は 11 世紀代のものとみられよう。

表 2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
弥生時代	弥生土器		弥生土器 1 点		
古墳時代	須恵器		須恵器 1 点		
飛鳥時代	土師器、須恵器		土師器 15 点、須恵器 16 点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦		土師器 8 点、須恵器 7 点、緑釉陶器 2 点、灰釉陶器 4 点、瓦器 1 点、軒丸瓦 1 点		
江戸時代	土師器、陶器、染付磁器		土師器 4 点		
合 計		14 箱	60 点 (1 箱)	0 箱	13 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 1 箱多くなっている。

江戸時代の遺物は土師器皿、陶器甕・鉢、染付磁器碗・皿、鉄製品釘などが土坑から出土した。江戸時代中期、18世紀前半のものともみることができる。

(2) 出土遺物

弥生時代から古墳時代の遺物（図12・13、図版4）

1は弥生土器甕の底部とみられるもので、左方に傾けた縦方向の粗いハケメを外面底部端まで施す。底部内面は未調整で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

2は須恵器杯身で、底部外面に回転ヘラ切り痕跡を明瞭に残す。口縁部立上りは低く斜め内側に延びて端部は丸く収める。体部、底部の器壁は厚く、胎土に砂粒を多く含む。

飛鳥時代の遺物（図14、図版3）

3～17は土師器である。3は皿、4は碗、5は杯、6は鉢、7は高杯、8～17は甕とみられる。4・5は内面に放射状の暗文を施し、4の底部外面にはヘラケズリがみられる。7は高杯の筒部で、皿部と裾部を欠く。筒部内面に絞り目が認められる。8は甕の把手部分とみているが、把手自体を欠いている。把手を持つ器形には甕や鍋などがあるが、把手部上位が内傾することから甕としている。9～13は口径12～14cm前後の小型の甕で、調整はハケメに拠っている。14は口縁端部を緩く上方に拡張させ、端面に沈線を廻らす。15・16は頸部外面に擬突帯がめぐる。17は口径32cm前後の大型の甕で、器面内外はナデとオサエによる調整を施す。

18～33は須恵器である。18～23が高台を持たない杯Aで、24～26が蓋、27が鉢、28～30・32・33が高台を持つ杯B、31が皿である。杯Aの22と23は底部のヘラ切り時に粘土を削り残したもので、擬高台状になっている。24・25は返りを持つ蓋で、24は返りの退化が著しい。26は口縁部を下方に折り曲げて整形し、端部を開き気味にして丸く収める。27は口径8cm前後

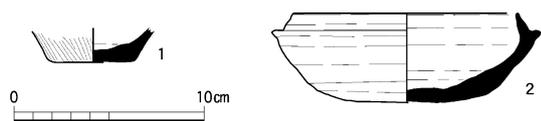


図12 出土遺物実測図1（1：4）



図13 弥生土器

の鉢で、口縁部は内傾気味に上方に延び、端部を拡張させ内側斜め上方に面を持たせる。底部の形状は不明である。28～30・32は杯の底部で、断面四角の低い高台を貼り付ける。31は皿の底部で同じく断面四角の高台を貼り付ける。33も杯の底部とみられるが、断面長方形の高い高台を外方に踏ん張らせて貼り付ける。

平安時代の遺物（図15、図版4）

34～41は土師器皿である。口縁部が外反して端部を内側に巻き込む、いわゆる手の字口縁の皿であるが、34～36が外反度合いが弱く、37～41の形態に対して先行性がうかがえる。

42～46・48・49は須恵器である。42～44は杯の底部とみられる。45・46は蓋で、口縁

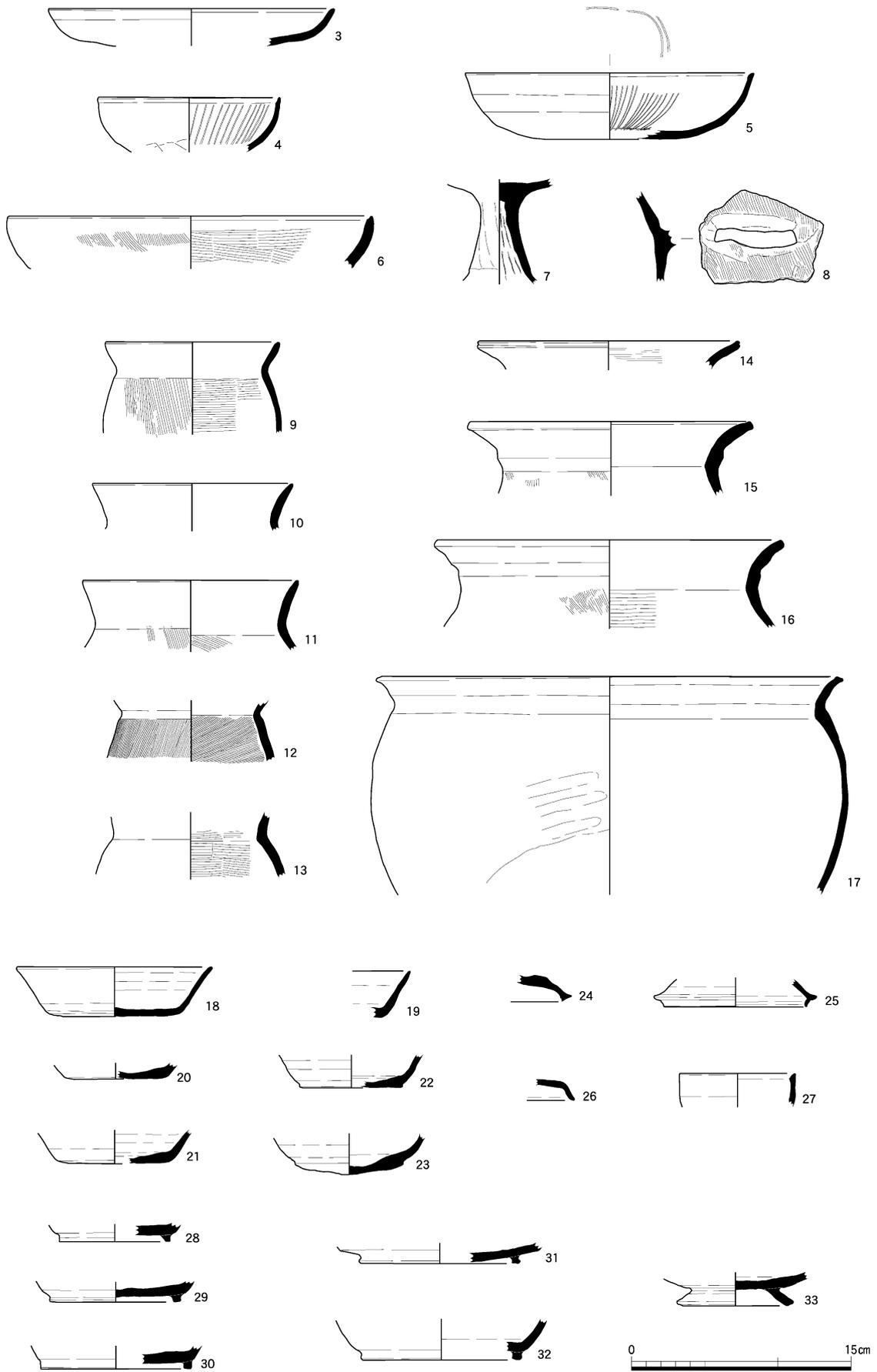


图 14 出土遺物実測図 2 (1 : 4)

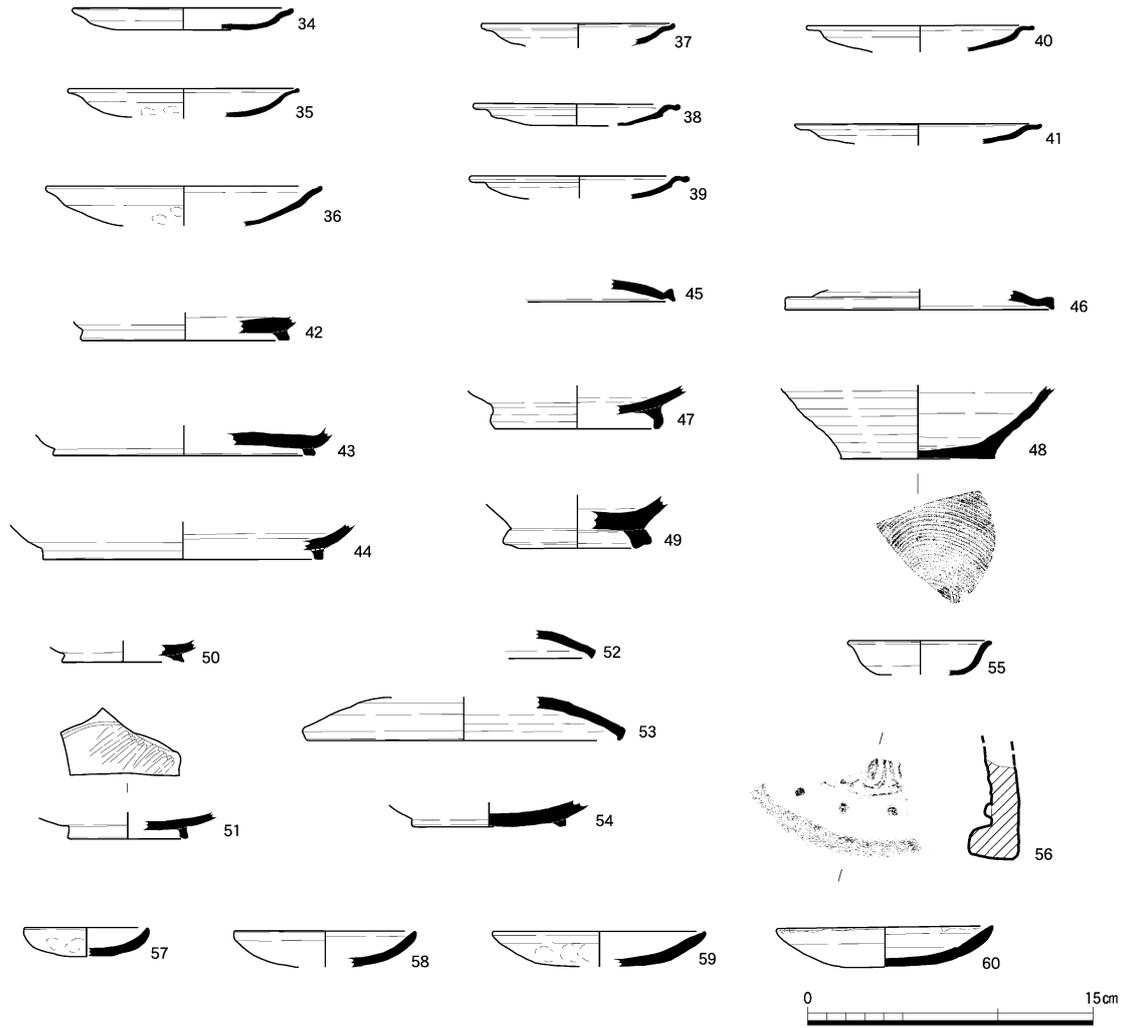


図 15 出土遺物実測図 3 (1 : 4)

部は斜め上方に外反して端部は肥厚し外方に面を作る。48 は鉢で、底部は平底で糸切りの痕跡を残す。49 は壺の底部で、体部以上を欠く。

50・51 は緑釉陶器皿である。50 は皿の底部で、高台は 2 段になでて貼り付け、濃緑色の釉を掛ける。近江産のものと思われる。

47・52～54 は灰釉陶器である。47 は皿の底部で、断面長方形の高台が取り付くが、先端を内側に丸め込むように屈曲させて貼り付ける。52・53 は灰釉の掛かる蓋で、口縁部は斜め下方に延び、端部を下方に小さく拡張させる。54 は皿の底部で、貼付の低い高台が付く。内面に薄い灰釉が掛かるが、外面下半と高台内には釉が認められない。

55 は瓦器皿である。口径 8 cm 前後で、体部が内湾して立ち上がり口縁部は外反し、端部を丸く収める。高台は付かないタイプとみられよう。

56 は蓮華文軒丸瓦である。外区に珠文が配され、内区に複葉とみられる蓮華文が認められる。江戸時代の遺物 (図 15)

57～60 は土師器皿である。いずれも江戸時代中期に属したもので、60 は内面に凹線が廻り、

口縁先端に煤が付着する。

4. ま と め

調査では、弥生時代の土器、古墳時代の須恵器、飛鳥時代の竪穴住居、堀状遺構、平安時代の柱穴、池状遺構、江戸時代の土坑などが検出された。

弥生土器片は、調査区の北辺一帯に比定される村ノ内町遺跡に関係するとみられるが、同時代の遺構に伴って出土したものではない。村ノ内町遺跡では、近年のJ R高架化工事に伴う発掘調査（周辺調査12・13）でも弥生時代中期の竪穴住居が発見されており、和泉式部町遺跡との関連性が指摘されている。遺跡は御室川右岸の自然堤防上に立地しているとみられ、和泉式部町遺跡を南限にし、広域下水道工事に伴う立会調査で遺構・遺物が集中して検出した地区（周辺調査8-1）を北限とする範囲内に展開した遺跡と推定できる。

古墳時代の須恵器杯身は古墳時代後期に属しており、常盤東ノ町古墳群に関係した遺物で、調査区北辺の未発見の古墳から混入したものであろう。常盤東ノ町古墳群では現在までに十数基の古墳が確認されているが、古墳群の展開に関しては広域下水道工事に伴う調査（周辺調査26）で検出した路面遺構を有する古道との密接な関係に留意する必要がある。現時点では古道の南側で検出した古墳の確かな報告が管見にない。このことから、古墳群は古道の北側に主要な分布域があり、古道から北側に枝状に派生した墓道によって各古墳と連絡する景観が復元できよう。

飛鳥時代の竪穴住居や堀状遺構は、古墳築造が終息した後の7世紀後半から8世紀の時期に属したもので、広隆寺旧境内やその周辺で発見される竪穴住居群と同様の時期と性格を持ったものとみられる。竪穴住居3棟は、同一の北西辺への傾きを有し、等間隔に配置されるなどの計画性も観察できる。堀状遺構は、竪穴住居の南辺を南北に区切る形で東西方向に掘り込まれ、中央の竪穴住居の南側付近に通路状の途切れもあり、竪穴住居群と密接な関係性を覗うことができよう。

平安時代以降とみられる柱穴は、多数が検出したものの、建物として復元するのは極めて困難である。一部で建物以外の用途も考慮する必要がある。埋土は黒色系と茶褐色系のものが認められ、成立の時期差と捉えることができる。柱穴からの出土遺物は希少であるが、平安時代前期から中期の遺物が出土している。

江戸時代には耕作に関係する土坑や、墓坑とみられる遺構があり、原野や森の環境からやや開発を受けた畑、墓地などが散見できる環境へと推移したものとみることができる。

表3 掲載遺物一覧表

番号	器種	器形	口径cm	器高cm	調整	胎土	色調	焼成	遺構名	時代	挿図	図版	備考
1	弥生土器	甕	底4.0	残1.9	ハケメ	粗	10YR7/4にぶい黄橙	良	精査中	弥生	12・13		
2	須恵器	杯身	11.8	4.7	回転ヘラキリ	密	N6/0灰	良	攪乱坑	古墳	12	4	混入
3	土師器	皿	19.4	2.7	ナデ	密	5YR5/6明赤褐	良	竪穴住居147	飛鳥	14	3	
4	土師器	椀	12.3	残3.8	暗文 ケズリ	密	5YR6/8橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
5	土師器	杯	19.8	4.6	暗文	密	5YR5/6明赤褐	良	竪穴住居81	飛鳥	14	3	
6	土師器	鉢	24.8	残3.6	ハケメ	密	7.5YR8/4浅黄橙	良	攪乱坑	飛鳥	14	3	混入
7	土師器	高杯	筒2.6	残7.3	ナデ	密	5YR6/8橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
8	土師器	甕	不明	残6.3	ハケメ	密	2.5Y6/8橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
9	土師器	甕	11.8	残6.3	ハケメ	密	10YR8/4浅黄橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
10	土師器	甕	12.8	残3.3	ナデ	密	5YR6/6橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
11	土師器	甕	14.7	残4.9	ハケメ	密	10YR7/4にぶい黄橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
12	土師器	甕	頸9.5	残4.0	ハケメ	密	10YR7/3にぶい黄橙	良	攪乱坑	飛鳥	14	3	混入
13	土師器	甕	頸10.5	残4.7	ハケメ	密	7.5YR6/4にぶい黄橙	良	攪乱坑	飛鳥	14	3	混入
14	土師器	甕	17.6	残2.0	ハケメ	密	10YR4/4にぶい黄橙	良	柱穴174	飛鳥	14	3	混入
15	土師器	甕	19.0	残5.1	ケズリ ハケメ	粗	5YR7/8橙	良	精査中	飛鳥	14	3	
16	土師器	甕	23.5	残6.1	ハケメ	密	2.5YR6/6橙	良	堀状遺構95	飛鳥	14	3	
17	土師器	甕	31.2	残15.1	ナデ 黒斑	密	2.5YR6/8橙	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
18	須恵器	杯	13.2	3.4	回転ヘラキリ	密	2.5Y7/1灰白	良	精査中	飛鳥	14	3	
19	須恵器	杯	不明	3.2	回転ナデ	密	5Y5/1灰	良	攪乱坑	飛鳥	14	3	混入
20	須恵器	杯	不明	残1.1	回転ナデ	密	N7/0灰	良	柱穴173	飛鳥	14	3	混入
21	須恵器	杯	底7.8	残2.2	回転ナデ	密	N6/0灰	良	池状遺構80	飛鳥	14	3	混入
22	須恵器	杯	底7.1	残2.3	回転ナデ	粗	7.5Y6/3オリーブ黄	良	精査中	飛鳥	14	3	
23	須恵器	杯	不明	残2.9	回転ナデ	密	N6/0灰	良	堀状遺構95	飛鳥	14	3	
24	須恵器	蓋	不明	残1.8	回転ヘラキリ	密	N6/0灰	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
25	須恵器	蓋	9.7	残1.9	回転ナデ	密	N6/0灰	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
26	須恵器	蓋	不明	残1.5	回転ナデ	密	2.5Y8/1灰白	良	竪穴住居147	飛鳥	14	3	
27	須恵器	鉢	7.9	残1.5	回転ナデ	密	N4/0灰	良	精査中	飛鳥	14	3	
28	須恵器	杯	底7.6	残1.3	貼付高台	密	N7/0灰	良	精査中	飛鳥	14	3	
29	須恵器	杯	底9.0	残1.9	貼付高台	密	N7/0灰	良	竪穴住居81	飛鳥	14	3	
30	須恵器	杯	底10.3	残2.6	貼付高台	密	N6/0灰	良	堀状遺構79	飛鳥	14	3	
31	須恵器	皿	底10.7	残1.5	貼付高台	密	2.5Y6/3にぶい橙	良	竪穴住居81	飛鳥	14	3	
32	須恵器	杯	底10.8	残2.9	貼付高台	密	7.5Y5/1灰	良	池状遺構80	飛鳥	14	3	混入
33	須恵器	杯	底7.2	残2.3	回転ナデ	密	2.5Y6/2灰黄	良	攪乱坑	飛鳥	14	3	混入
34	土師器	皿	11.4	1.2	ナデ	密	10YR7/3にぶい黄橙	良	池状遺構80	平安	15	4	
35	土師器	皿	12.0	1.5	ナデ	密	10YR8/3浅黄橙	良	池状遺構80	平安	15	4	
36	土師器	皿	14.5	2.1	ナデ	密	10YR8/3浅黄橙	良	池状遺構80	平安	15	4	
37	土師器	皿	10.0	残1.3	ナデ	密	7.5YR7/6橙	良	精査中	平安	15	4	
38	土師器	皿	10.8	残1.2	ナデ	密	10YR8/4浅黄橙	良	精査中	平安	15	4	
39	土師器	皿	11.6	1.2	ナデ	密	10YR7/3にぶい黄橙	良	精査中	平安	15	4	
40	土師器	皿	11.8	残1.4	ナデ	密	10YR8/2灰白	良	池状遺構80	平安	15	4	
41	土師器	皿	12.8	残1.1	ナデ	密	10YR7/3にぶい黄橙	良	攪乱坑	平安	15	4	混入
42	須恵器	杯	底10.8	残1.3	貼付高台	密	5Y7/1灰白	良	池状遺構80	平安	15	4	
43	須恵器	杯	底13.6	残1.6	貼付高台	密	N6/0灰	良	池状遺構80	平安	15	4	
44	須恵器	杯	底14.7	残1.9	回転ナデ	密	N5/0灰	良	精査中	平安	15	4	
45	須恵器	蓋	不明	残1.2	回転ナデ	密	5Y6/1灰	良	攪乱坑	平安	15	4	混入
46	須恵器	蓋	14.0	残1.0	回転ナデ	密	7.5Y5/1灰	良	精査中	平安	15	4	
47	灰釉陶器	皿	底8.6	残2.3	貼付高台	密	N7/0灰	良	堀状遺構79	平安	15	4	混入
48	須恵器	鉢	底8.0	残3.9	回転ナデ	密	7.5Y7/1灰白	良	精査中	平安	15	4	
49	須恵器	壺	底6.2	残2.8	貼付高台	密	N6/0灰	良	精査中	平安	15	4	
50	緑釉陶器	皿	底6.3	残1.2	貼付高台	密	10YR8/4浅黄橙	良	精査中	平安	15	4	
51	緑釉陶器	皿	底6.0	残1.4	ミガキ	密	釉10YR6/3にぶい黄橙	良	精査中	平安	15	4	
52	灰釉陶器	蓋	不明	残1.5	回転ナデ	密	釉7.5Y5/2灰オリーブ	良	堀状遺構79	平安	15	4	混入
53	灰釉陶器	蓋	16.4	残2.3	回転ヘラキリ	密	N6/0灰	良	精査中	平安	15	4	
54	灰釉陶器	皿	底7.5	残1.4	回転ナデ	密	2.5Y7/2灰黄	良	精査中	平安	15	4	
55	瓦器	皿	7.3	残1.9	ナデ	密	5Y8/1灰白	良	精査中	平安	15	4	
56	軒丸瓦		縦2.7	横5.3		密	10YR8/2灰白	軟	池状遺構80	平安	15	4	
57	土師器	皿	6.4	1.6	ナデ	密	7.5YR7/4橙	良	土坑32	江戸	15		
58	土師器	皿	9.4	2.0	ナデ	密	7.5YR7/6橙	良	土坑32	江戸	15		
59	土師器	皿	11.2	1.9	ナデ	密	5YR6/6橙	良	土坑32	江戸	15		
60	土師器	皿	11.4	2.2	ナデ	密	7.5YR7/4橙	良	精査中	江戸	15		

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわひがしのちょうこふんぐん							
書名	常盤東ノ町古墳群							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-17							
編著者名	平田 泰							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわひがしのちょう 常盤東ノ町 こふんぐん 古墳群	きょうとうしゅうきょうく 京都市右京区 ときわなかのちょう 常盤仲之町 3-26	26100	874	35度 01分 08秒	135度 42分 32秒	2008年11月 25日～2009 年1月14日	390m ²	住宅建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤東ノ町 古墳群	古墳	飛鳥時代	竪穴住居、堀状遺構	土師器、須恵器				
		平安時代	池状遺構、柱穴、土坑	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦				
		江戸時代	土坑、柱穴	土師器、陶器、染付磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-17
常盤東ノ町古墳群

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961